

海外農林業情報 No. 95

目次

【JAICAF 事業の紹介】JRA 畜産振興事業「養蜂経営における女性の貢献調査事業」… 1

【JAICAF 事業の紹介】JRA 畜産振興事業「養蜂経営における女性の貢献調査事業」

当協会では 2015 年 4 月から 2018 年 4 月まで、モンゴルで JICA 草の根技術協力事業「養蜂振興による所得向上プロジェクト」¹を実施しました（写真 1、2）。このプロジェクトには、日本から専門養蜂家が参加して技術指導に関わった他、若手養蜂家や蜂具メーカーの関係者も自費で参加し、モンゴル人養蜂家のみならず、当協会にとっても大いに学びの機会を提供してくれました。そのような機会を得て、日本の養蜂関係者とさまざまに情報交換をする中で、これまで、当協会が経験を持つ耕種農業部門とは様子の違った、日本の養蜂業の現状を知ることになりました。



写真1 モンゴル人養蜂家と一緒に



写真2 モンゴルの蜂場

皆さんは、日本の養蜂の現状について、どのくらいご存知でしょうか。

養蜂といえば、思い出すのは「蜂蜜」でしょう。日本で流通する蜂蜜は、4万6千トン。そのうち 94%は輸入品で、さらにその 70%が中国産です。国産の蜂蜜は、流通量のうち僅か 2800 トン（6%）に過ぎません²。

日本には、ニホンミツバチが自生しており、その蜂蜜も利用されてきました。しかし、ニ

¹ 国際農林業協力 Vol. 40 No. 4 (<http://www.jaicaf.or.jp/reference-room/publications/detail/article/1020.html>)、海外農林業情報 88 号 (<http://www.jaicaf.or.jp/reference-room/publications/detail/article/1111.html>) をご参照ください。

² 農林水産省生産局畜産部「養蜂をめぐる情勢」平成 30 年 11 月

ホンミツバチを始めとするトウヨウミツバチは野生種であり、生産の主役はセイヨウミツバチです。セイヨウミツバチは、古くから家畜化され、人間に馴れて飼育しやすく、採蜜量も期待できるのです。セイヨウミツバチは、日本には明治 10 年カリフォルニアから輸入され、内藤新宿試験場（今の新宿御苑）で飼育が始まりました³。その後、日本養蜂の特徴でもある転地養蜂⁴を行いながら、発展してきました。農業部門で見られるような普及員による技術普及や試験研究機関による技術開発ではなく、親方と弟子の徒弟制度の中で、技術や蜂場が引き継がれてきたといえます。

流通量のほとんどを輸入品が占めること、外側からは分かりにくい構造であることなど、一般社会において、養蜂のことを知る機会が限定されており、個々の養蜂家がどのように生産と向き合っているのか、よく分からない現状があります。養蜂業に関する調査研究の実績もごくわずかで、体系化された技術書も、社会経済的な論文もなかなか見当たりません。

一方、モンゴルの養蜂プロジェクトでは、獣医が養蜂の生産工程をチェックしたり、研究者が技術を開発・体系化したりする試みを続けています。そんな中、日本の養蜂関係者は男性が多いのに対し、モンゴルでは女性養蜂家や養蜂関係者が多いな、ということに、ふと気づきました。

現在の日本社会においては、女性の働きに注目が集まり、労働力としても期待されるようになってきています。農業部門では、農林水産省が「農業女子プロジェクト」を立ち上げ、積極的な女性参加が目指されており、農業協同組合役員への女性の登用なども進んでいます。女性が積極的に農業に関わることで、六次産業化や農村起業なども盛んになってきたといわれ、養蜂においても、女性の情報発信能力が高まることは、一般の人々が養蜂産業について知る機会を提供することにつながるのではないかと。そのような期待をもちましたが、女性がどのように養蜂に携わっているのか、そもそも、養蜂業における女性の姿が見えてきませんでした。そのため、まずは女性の貢献を可視化することが必要だと考え、当協会では今年度、日本中央競馬会より助成を受け、養蜂分野での女性の貢献について調査を実施しました。

調査は、アンケート調査と事例調査から構成されました。

アンケート調査は、女性が養蜂にどのように関わっているかを明らかにするとともに、各世帯／法人の養蜂経営・事業にとって、女性の関わりがどのように影響しているかを探ることを目的としました。また、併せて、男女別の意向調査を実施し、将来の意向を把握しました。意向調査においては、農業部門で過去に実施された調査⁵をベースとして行うことで、農業部門との比較を行うことも、目的の一つとしました。

³ 貝瀬収一、日本養蜂の歴史、<https://history38.jimdo.com/>（2019 年 3 月 14 日アクセス）

⁴ 蜜源や花粉源となる植物の開花に合わせて、蜂場を変えながら移動していく養蜂スタイル。

⁵ 農林水産省「農家における男女共同参画に関する意向調査」平成 21 年 3 月公表

埼玉県養蜂協会の全面的なご協力を得て、埼玉県内養蜂家を中心として、長野、東京、静岡の計 101 軒の養蜂家／法人から回答を得ました。アンケートは 3 部構成で、①女性と養蜂への関わり、②養蜂事業・経営の概要、③女性の経営参画に関する意向を質問しました。それぞれの回答数は、①82 件、②90 件、③女性 50 件・男性 82 件でした。

アンケートの結果からは、①の回答女性のうち 77%が養蜂に関与し、さらに、関与している女性のうち 58%が“養蜂に関して自分の意見を言い、それが採用されること”が「よくある」あるいは「時々ある」と答えています（図 1）。また、蜂蜜を販売している女性のうち、27%が“これまで、新しい販売方法を提案／実行したこと”が「ある」と答えました。また、養蜂に関連する 80 の仕事を抜き出し、関与度を尋ねた質問からは、養蜂作業に合わせた家事の関与度が概ね高く、さらに、蜂蜜の瓶詰や販売など商品を扱う作業および採蜜に関わる作業の関与度が高い結果となりました。最も関与度が高い作業は“お客様に販売する”、次が“養蜂作業に合わせて食事を作る”でした。

また、養蜂労働の時間を尋ねたところ、繁忙期の平均は 4 時間 54 分で、うち、専業養蜂家の平均時間は 9 時間 37 分でした。最長は 16 時間で、10 時間以上と答えた女性は 10 人いました（図 2）。

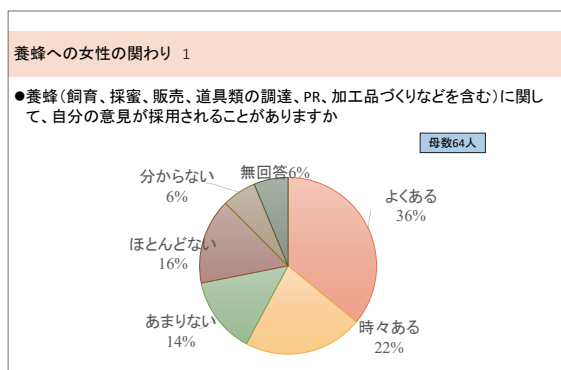


図 1 意思決定への女性の参画

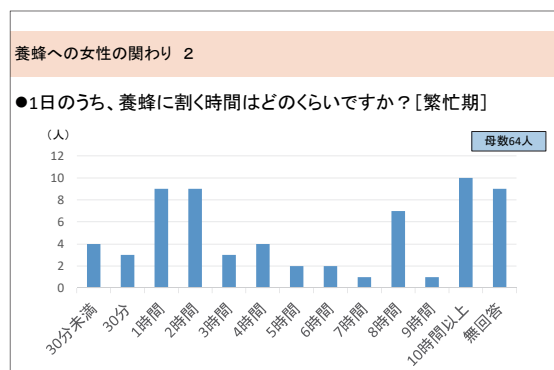


図 2 女性の養蜂労働時間(繁忙期)

過去 5 年間の経営の変化についても尋ね、その変化と女性の関わりに何らかの関連があるかも分析しました。経営変化については、アンケート②に回答のあった 90 件のうち、5 年前と比較して“飼育群数が増えている”のは 32%、“売り先や買ってくれる人が広がっている”は 42%、“扱う生産物や商品の種類が増えている”は 12%でした。こうした経営拡大と女性の関与を見ると、“女性の平均養蜂労働時間が長い”こと、“女性が意見をいい、それが採用されることが「ある」「時々ある」”こと、“女性が販売方法を提案し、実行している”こと、“女性に研修受講経験がある”ことと経営拡大には正の相関関係が見られました（図 3、4）。

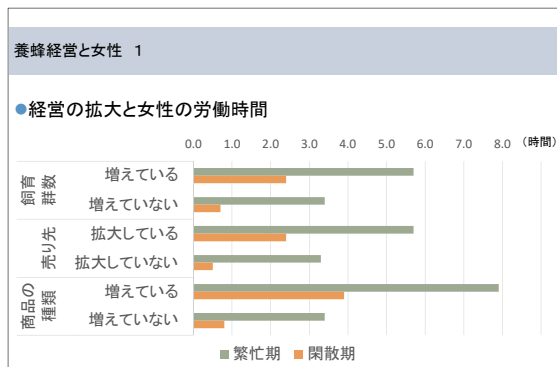


図3 経営拡大と女性の労働時間

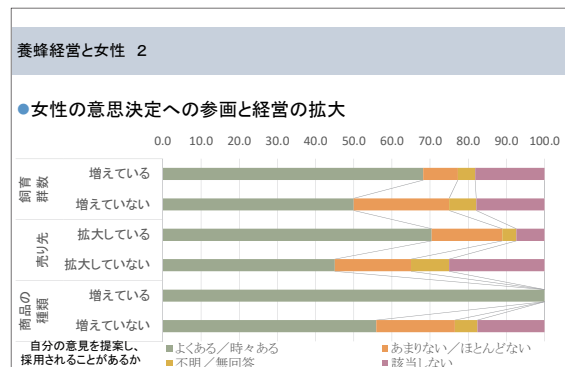


図4 女性の意思決定の参画と経営

これらの結果から、女性の養蜂への関与はさまざまな作業で見られ、かつ、経営拡大との正の相関関係もあるといえます。一方、「飼育責任者である男性が一人で養蜂を行っている」、とした養蜂家のうち5件では、同じ世帯内の女性は「自分は関与している」と答えており、女性の労働が認識されていない場合もあることが判りました。

また、アンケート③女性の経営参画に関する意向調査では、“女性が養蜂経営方針の決定に参加しやすい環境を整えるうえで、最も必要だと思うこと”として、男女ともに、「養蜂技術・経営等に関する知識を習得する」ことが最も多く挙がりました。アンケート①の結果からも、女性が研修を受講することは、養蜂に関する情報入手先の多様化や、今後自分が主体となってやってみたい仕事の具体化につながることを示唆されており、女性が研修を受講しやすい環境を整備することが重要であるといえます。また、女性が希望する研修テーマとしては、「飼育技術」、「ミツバチの生態」、「販売促進」、「社会・教育活動」が挙がり、現在関与度の高い販売部門だけでなく、ミツバチの飼育にも関心を持っている人がいることが窺われました。

事例調査では、全国7ヵ所で女性養蜂家やその家族にインタビューを行いました。主要な収入源として養蜂を行う養蜂経営を対象とし、そのうえで、できるだけ多様な関わり方の事例を扱うことを意図しました。

インタビューでは、家族経営の難しさや労働環境、ネットワークづくりなど女性ならではの課題が挙げられた他、地域との関係や蜜源確保の難しさなど、現在の養蜂業を取り巻く大きな課題についてもたくさんの言及がありました。

一方で、労働環境改善のため、比較的腕力のない女性や高齢者向けの[道具類の開発や導入](#)も進められています。今後も、できることから着手していくことが期待されます。

今回の調査を通じて、蜜源の減少に伴う養蜂環境の劣化、農地に依存せざるを得ない養蜂業のリスク、地域住民との軋轢、新規参入者の増加と病虫害防除の問題といった養蜂業の課題が、ますます多様化かつ深刻化している印象を受けました。

養蜂は、蜂蜜だけではなく、ローヤルゼリー、プロポリス、花粉などの他、花粉媒介（ポリネーション）という重要な産品があります。農業生産にとっても自然環境にとっても、大きな役割を果たす産業であり、その可能性は、養蜂を取り巻く状況が厳しくなっても減じることはありません。

これら課題と可能性の双方が、現在では、社会に十分認知されているとはいえません。

こうした中、女性の参画が広がることは、販売や社会的な活動といった市民社会との接点を増やし、深めることにつながるでしょう。蜜源やミツバチそのものに社会の関心を惹起し、「わが国・わが町に養蜂あり」と市民社会が認知するために、“販売”や“社会活動”の部門ができることは大きいのではないのでしょうか。今回の調査結果は、女性は多くの養蜂労働を担っているし、課題解決に大きな役割を果たしていくことになるだろうとの印象をもたらすものでした。

本調査は、対象件数や地域が限定されていることから、結果も限定的なものとならざるを得ませんでしたが、こうした情報が少ない現状においては、貴重なデータを提示したものと思います。

女性が養蜂業の維持発展にどのように貢献できるか、今後、さまざまな調査研究が続くことを期待しています。

調査報告書は当協会のウェブサイトからダウンロードできます。

→[JRA 畜産振興事業「養蜂経営における女性の貢献調査」 調査報告書](#)

※本調査事業は、JRA からの助成によって実施することができました。

実施に当たっては、埼玉県養蜂協会の皆様に多大なご支援と惜しみないご協力を賜りました。また、調査に対応してくださった養蜂家の皆様がおられなければ、本調査は実施できませんでした。

養蜂分野の学識経験者や養蜂関連組織の方々、農村開発の専門家、ジェンダー論の専門家からも貴重な助言をいただきました。

ここに、感謝申し上げます。

（文責：西山亜希代）

本情報のメール配信をご希望の方は、件名に『海外農林業情報配信希望』と記入した空（から）メールを下記までお送り下さい。ご意見、ご感想もお待ちしております。 E-mail アドレス：deskb@jaicaf.or.jp
メールを送付された方には、確認メールをお送りします。送信後 2 週間以内に届かない場合は、お手数ですが 03-5772-7880（担当：森・西野）までお電話下さいますようお願い申し上げます。なお、メール配信をご希望の方には、本ミニ情報のほか、セミナーのご案内等、当協会からのお知らせが届くことがありますので、併せてご了承下さい。

発行：公益社団法人 国際農林業協働協会 (JAICAF)

〒107-0052 東京都港区赤坂 8 丁目 10-39 赤坂 KSA ビル 3 階